

第8群 先天異常に関する問題

56. 催奇形作用の臨界期について

(京大解剖) 谷村 孝

外因により誘起された先天異常は、その要因の適用された時期の胎児の発生段階に応じて、出現する異常の型と頻度とが異ってくるが、私は外因として、胎盤を通過して胎児に働く化学物質のうち抗腫瘍剤を取り上げ、まず動物実験でこれらの関係を検索した。

生後2～3カ月の初妊マウス(dd)を用い、妊娠6～15日のいずれか1日に1回、thio-TEPAを7.5mg/kg腹腔内に投与、18日に屠殺し、胎仔の発生の阻害状況を検索し、生存仔は外形観察後、Alizarin red S骨染色標本を作成し、骨系統の異常を精査した。

妊娠6～7日、即ち着床後間もなく処置したものは、外脳症等が低い頻度で認められた以外には外形上異常は認められなかった10日処置では、外形異常の出現は最高で、欠指・多趾等の四肢異常や短曲尾等が示され、12～13日処置では口蓋破裂等がその主たる異常であった。骨染色標本では、外形異常に応じた四肢骨の異常の他、中軸骨格にも顕著な異常が示された。中でも脊椎骨は、6日では上部頸椎に、以下処置日が遅くなるにつれて異常発現部位が下降し、11日以後では異常は見出されなかった。

よつて、マウスではこの条件下では、6～14日にわたり異常の種類により種々の臨界期を持つことが知られた。またこの所見を基として、我教室が現在募集中の日本人初期胚とマウスの発生段階とを比較して、人の先天異常の危険期についても若干の考察を試みる。

57. 先天異常特に心臓奇形に就いての考察

(横浜大口病院) 緒方 俊弘

先天異常は多種多様であるが、その中で最も多いのが中枢神経系異常で、全異常の40～60%を占め、次いで心臓奇形、消化器異常、皮膚筋肉異常、性器異常などの順になつている。

心臓奇形の頻度として Mc Intosh 等は5964分娩中0.9%を報じ、シカゴ産院の報告では53847分娩中心臓異常による死亡例が0.1%となつている。

次に心臓奇形の原因としては、遺伝(劣性遺伝)或は環境因子が挙げられており、しかも両因子が合併する場合もあるという。なお環境因子としては、妊娠早期におけるウイルス性疾患、栄養不足、胎児の酸素欠乏等の他、放射線、ホルモン、糖尿病、Toxoplasma 症、化学

物質等の作用が挙げられているが詳しいことは分つていない。

余はたまたま本院において分娩総数3990例の内5例の心臓奇形を認めたが、その内訳はボタロー氏管開存3例、卵円孔の開存1例、両者合併1例である。これ等の奇形児の示した徴候としては、チアノーゼ、呼吸困難、心臓部の雑音等がみられ、ことにチアノーゼは啼泣後に初めて現われることが多い。新生児で出生後間もなく死亡した症例の中には、心奇形のあるものが少なくないと思われるのでこれを確かめる意味において剖検が望まれる。

58. 当院開院以来25年間に於ける新生児奇形に関する統計

(東京通信)

楠本 雅彦, 下平 和夫, 島中 俊次,
大沢 辰治, 伊藤 宜孝, 清水 昭造,
高橋 哲也, 田中 穂積, 植松 修

新生児奇形に関する研究、調査は今日まで幾多のすぐれた業績が報告されているが、近年所謂 Thalidomide Babies の出現によりこの問題が漸く再認識され、総合的に調査研究がなされる様になつてきた。我々もここに東京通信病院開院以来25年間の新生児奇形の統計をまとめたので報告し、この研究の一助としたい。

当院開院以来25年間(昭和13年～昭和37年)の分娩総数は17218例でこの中奇形分娩は84例(0.55%)である。年度別頻度は非常に差があり、0%より1.24%となるが逐年的な増加の傾向は認めていない。奇形の種類は合併奇形を含むため総数99となり、前方破裂(22%)が最も多く、次いで四肢奇形(21%)、中枢神経系奇形(18%)、内臓奇形(12%)、泌尿生殖器系(6%)、骨奇形(7%)、皮膚系(5%)その他となつている。

奇形児を分娩した母親の年齢及び経産回数をみると、20～29才が71.4%と圧倒的に多く又初産では初産42例、経産42例と同数で、又経産では1回経産が24例でもっとも多い。奇形の種類別の出産後の生死或は死産との関係をみると、児の死亡及び死産は中枢神経系に最も多く(18例中死亡2例、死産16例)について内臓奇形、泌尿生殖器奇形等の順となつている。

母体合併症をみると早産、妊娠中毒症、羊水過多症などが目立ち、奇形児を分娩した母親の%は何らかの型で妊娠中に合併症をもっている。